

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	黒岡 佳柁 (くろおか よしまさ)
○学位の種類	博士 (文学)
○授与番号	甲 第781号
○授与年月日	2011年9月25日
○学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項 学位規則第4条第1項
○学位論文の題名	ハイデガーにおける「共存在」の研究 －「学」、「死」そして「われわれ」－
○審査委員	(主査) 加國 尚志 (立命館大学文学部教授) 日下部 吉信 (立命館大学文学部教授) 谷 徹 (立命館大学文学部教授)

<論文の内容の要旨>

本論文は、20世紀ドイツの哲学者マルティン・ハイデガー(1889-1976)の哲学における他者との共同存在(「共存在 Mitsein」)の問題を、「学問」「死」「われわれ」というタームに沿って論じながら、ハイデガーの思想において他者との「共存在」の問題が一貫した重要なテーマであり、ハイデガー哲学の根本的な理解のために不可欠な問題であることを明らかにすることを試みるものである。

従来、ハイデガーの哲学において「他者」の問題は背景に退けられたものとして、批判的な評価がなされてきた。たしかに『存在と時間』では、「共存在」の概念が提示されつつも、その中心的な論点は本来性へと立ち返った実存の「自己 Selbst」であり、この「自己」が他ならぬ私のものである「死への存在」としての自覚に基づきつつ、「先駆的覚悟」による時間地平の脱自的統一から、通俗的な時間論を退け、本来的な存在論の地平を望見することにあつたことは哲学的にほぼ通説となっている。そこから、ハイデガーにおける他者論や倫理の欠如という批判(レーヴィット、和辻など)も生じ、フッサールやレヴィナス、あるいはアーレントらと比較した場合のハイデガー哲学の欠点として指摘されることもあつた。ハイデガーが、一時期のこととはいえナチスに加担したことも、そうした哲学上の欠点と結びつけられる傾向があつたと言えよう。

本論は、そうした一般的な理解に対して、ハイデガーが「共存在 Mitsein」に一貫して積極的な意味を与え、それはとりわけ「学的現存在」として、共同に学問(この場合は哲学)を遂行する者として常にその論述の視野に置いてきたことを明らかにしようとするも

のである。そうしたハイデガーの思想において『存在と時間』に示されていた学問の変革の要求は具体的な大学改革の要求として初期の講義で語られていた、と本論文は主張する。

第一部『存在と時間』における「学」と共同体では、ハイデガーが『存在と時間』で述べた「本来の実存」としての共同体が「学的共同体」（学問共同体）を意味することが主張され、『存在と時間』での「単独化」と「共存在」あるいは「共同体」との連関を明らかにする必要があることが述べられる。その際に手引きとなるのが、「実存論的分析論」における「共導」という観点である。ハイデガーが個別科学的な領域に自閉する学問に対して、それらの学問における自明の前提が疑われる「危機」においては、知識の外部にある「根本諸概念」が問われねばならないことを主張したとき、そこで考えられていたのは、個別的な諸科学に対して、そうした根本概念に「率先的に教示しつつ飛び込む」という哲学の優位である。このような意味での哲学の機能をハイデガーは「実存論的分析論」「基礎的存在論」という彼の哲学的方法論の内に見ていることを本論文は主張する。現存在の前学問的な存在了解を明らかにする基礎的存在論によって、哲学は諸学に対する指導的立場を示すことができるとハイデガーは考えていたのである。

さらに、本論文では、『存在と時間』における本来性への「実存的変様」に、他者との「共存在」が含まれていることが主張され、伝統的哲学史の存在概念を破壊する「基礎的存在論」の試みが、「共存在」の「実存論的変様」を伴うことが述べられる。ハイデガーの「基礎的存在論」の動機と目的には、哲学が「共に導く」という形で他の学問との共同性が前提とされていたことを本論文は指摘している。

このような論点を背景として、本論文では『存在と時間』における「共存在」の概念がハイデガーの論述に則しながら解釈されていく。「非本来性」「日常性」における現存在は、「活動／作品」の「現実化を企図」し、その企てにおいて、他者との「代理可能性」が前提とされており、「代理しつつ支配する」「顧慮Fürsorge」が根本にあると本論文は指摘する。それは非本来性としての「世人das Man」としての他者との関わりであり、ここでは自己と他者は、代理可能性と有用性の見地から事物化されてしまっている。それに対して、本来的な「開示性」に基づく他者関係をハイデガーが想定していたことを本論文は主張する。たとえば「情態性Befindlichkeit」にしても「共情態性」という形で考えられていたことが述べられる。しかし、それでも現存在を本来性に立ち返らせる「死」において、他の現存在の死を私の死として経験することの不可能性は動かしがたいのではないか。それに対して本論文はハイデガーの「私のもの」としての「死」は、本来の「共存在」の在り方から「決して分離していない」ことを主張する。「私のもの」としての「死」への投企は「新たな共存在」の可能性を開示するのである。それは死への先駆的覚悟が、他者との共存在における存在可能を「本来的に了解させる」ということである。本論文の主張では、ハイデガーの先駆的覚悟は、自己の単独化に自閉するのではなく、そこから共存在の可能性が与えられるような存在了解の開示であることになる。

こうした共存在との存在了解の「分かち合いMitteilung」の可能性を、本論文は「語り」に認めている。「語り」は共情態性や共了解という形での「分かち合い」を契機として含んでいる。本論文がその例証とするのが、ハイデガーにおける「友の声」の分析である。

「友」としての「別の現存在」の「声」を「相互に一聴くこと」によって自らの最も固有な存在可能に開かれる可能性をハイデガーが語っているのだとしたら、「友」としての「現存在」は、本来の実存としての「自己」のさらに先行的な可能性の条件となっていることになる。この「語り」の様態が「沈黙から真正に聴きうる」と透明な相互共存在が生まれる「沈黙」であるという点に、本論文はハイデガーの「良心の呼び声」と「先駆的覚悟性」の根本的な論点を見ている。それは「異他的な声fremde Stimme」なのである。

このように「実存変様」における良心の呼び声に認められる他者の問題を指摘しながら、本論文は、ハイデガーの「単独化」と「共存在」の議論の連動性を主張し、「先駆的覚悟」において「他者の共現存在についての開示性を等根源的に変様させる」とハイデガーが述べていることに注目する。この変様の在り方として、非本来的な顧慮における「代理しつつ支配する」ことではなく、「率先的に教示しつつ自由にする」顧慮が考えられていることを本論文は指摘している。ここにハイデガーは、「本来の相互共存」を見ていたのであり、実存の単独化は、共存の否定ではなく、「本来の相互共存」の回復の試みであったことになる。

本論文は、そこから論を展開させ、このことはハイデガーにとって「基礎的存在論」としての「哲学」の遂行が、他者と共に遂行するという面を持っていたのではないかと指摘する。それは『形而上学とは何か』で語られる「学的現存在das wissenschaftliche Dasein」としての「共存在」である。そしてさらにそこから、本論文は、『存在と時間』で語られている「民族 Volk」が、従来のハイデガー批判においてナチス的な民族共同体と解釈され批判されてきたことに対して、むしろ哲学をする者の学問的共同体の本来性として語られているのではないかと、とする解釈上の仮説を提示する。現存在の存在が「共存在」であるなら、「本来の相互共存」は、「民族」「共同体」という在り方を問題とすることになるが、これまでの議論からしても、「民族」は何ら互いに融合する者同士の共同体ではなく、「単独化」された現存在の「連帯性」として語られていることになる。そこには「単独化」と「共存在」の乖離と連動を伴う「動的な」意味がある、と本論文は主張する。このような意味で、『存在と時間』の根底にあった伝統的哲学史の破壊、基礎的存在論の主張の根本には、「学的現存在」としての「共存在」という他者との連帯性があったのであり、「民族」や「共同体」も時局的あるいは政治的文脈においてのみではなく、ハイデガーの哲学的な動機から語られていることが主張されるのである。

こうした学問的共同体の場としての「大学」の在り方が、初期ハイデガーにおいて重要な意味を持っていたことが、第二部「ハイデガーと大学―「共に哲学する者」の共同性へ向かって―」で論究される。ハイデガーの大学改革論は、政治的な文脈よりも「共に哲学する者」の歴史的な共同体の形成というモチーフに貫かれている、と本論文は主張する。

『存在と時間』以前の講義において、哲学を「原学Urwissenschaft」ととらえるハイデガーは、「生」に対する「了解的な直観」を行使することを、学的理論の対象化の次元と対立させている。そのなかで、大学は、「生の連関」「現事実的な生」への問いの場として顕在化される。このかぎりではハイデガーにとって、大学は「現事実的な生」を活性化させる哲学によって主導されねばならない。こうした論点に対して本論文では、1916年の論文「歴史学における時間概念」を参照しながら、ハイデガーの大学改革の問題意識が1933年の悪名高い「ドイツ大学の自己主張」まで17年間にわたることを指摘し、その根本的なモチーフが哲学による個別学の指導にあることを明らかにする。1924年の『アリストテレス哲学の根本概念』から翌1925年『時間概念の歴史への序論』講義に至るまで、ハイデガーの主張は、現象学が「前理論的な」「現実性」を開示し、諸学に対し、根本概念を規定する前学問的な経験へと率先的に飛び込むものであることを述べるものであった。そこには「哲学すること」が大学における「指導」を担うものであるという構想がある。そうしたハイデガーの学問論は、彼の真理概念にも現れている。ハイデガーは、研究を「研究者たちの共同体」における作業と考えており、最も根源的な真理がそのような「共同体の生起」から生じてくると考えられていたことが指摘される。そのことは講義『哲学入門』によく示されており、現存在の「相互共存在」や「共存在」が、存在の真理としての「非隠蔽性」を分かち合うことが述べられている。そこには「参与Teilnahme」という論点が見られ、現存在は他者との「参与」として存在すること、非隠蔽性としての真理を他者の現存在と分かち合うものであることが述べられている。それはハイデガーの真理概念の中核である「現Da」が分かち合われるという形で、共存在の必然性が述べられているのである。

このようなハイデガーのモチーフは「ドイツ大学の自己主張」においても「闘争共同体」という形での学問的共同体として語られている。本論文では、この「闘争」という着想が、『形而上学入門』でのヘラクレイトス解釈に見出されるとし、ハイデガーの用いる「闘争」が存在者の存在の動向を指すものとして、戦争や議論といった人間の営みのことではない、と指摘する。その意味で「ドイツ大学の自己主張」における「闘争共同体」は、学の再建としての共存在という『存在と時間』の主張とも連続している。ハイデガーの主張は、政治的な文脈ではなく、このような大学改革論と哲学の文脈の中でとらえられるべきなのである。

もっともハイデガーもそれ以降は、積極的な大学改革論を語らなくなっていき、諸学を指導する哲学を主張するよりも、むしろ「放下Gelassenheit」のような「省察Besinnung」の立場をとるようになっていく。後年のハイデガーの立場は哲学と他の学問との関係を塞いでしまう可能性があることを本論文は指摘している。

つづいて第三部「「死」「共同存在」「われわれ」への問い」では、こうした「共存在」への問いが一人称複数としての「われわれ」への問いを含むものであることから、ハイデガーにおける「死」と「われわれ」の両立可能性について議論が展開される。ここで本論文は、ハイデガーにおいて「死」と「われわれ」の関係についての論述が不十分であるこ

とを指摘しながら、ジャン＝リュック・ナンシーやアルフォンソ・リングスらの議論をも参照しながら、「死」と「われわれ」をつなぐものを考察している。

『存在と時間』ではほとんど論じられることのなかった一人称複数「われわれ」の問題は、1934年の『言葉の本質への問いとしての論理学』で展開されている。『存在と時間』では「私」という一人称の次元が議論されていたが、そこでは「われわれ」という一人称複数の次元から議論が始められている。この講義では、「われわれ」は「民族Volk」である、と主張されている。そこでは「自己」はあらゆる人称を越え、それに先立っている、とされ、また「民族」は人種主義や文化人類学的な概念ではなく、現存在の根源的複数性を示すものと解釈されている。したがって、そこには「単独化された者たち」という複数形が見られ、孤立の個人主義とも融合の共同体主義とも異なる論点が提出されている。それは「隠された調和」によって、単独化された者たちの「分断」と「調和」の両義性が示されているのである。

こうした根源的な複数性としての「単独化」を「私の死」から論じることが、しかし妥当であるのだろうか。こうした点で、本論文はハイデガーに対してナンシーやリングスの議論を援用する。ナンシーにとって死は脱主体化、脱内在化であり、そこに自他の「共一出現」としての共同体の可能性を見ている。ナンシーにとって、死は「同化させると同時に分け隔てる」「分有」として捉えられており、「もろもろの有限的な特異性に由来する共実存」の場と考えられている。還元不可能な「特異存在」が複数で「共一出現」する事態としての「共同体」「われわれ」がそこでは論じられている。またリングスは、「死に行く者」に付き添うという場面を想定しながら、「共通の死」という問題設定を提出している。これはハイデガーが『存在と時間』で不可能と見なしたものであるが、リングスは死に対する人間の受動性を強調することで、合理的な共同体概念ではすくいあげることができないような他者との邂逅の可能性を論じている。そこにはレヴィナスの「傷つきやすさ」からの影響がうかがえると同時に、「死」において日常性の外部に位置づけられる異邦の「友」との邂逅が、死に付き添うという形で考えられている。それはハイデガーが不可能と見なした「共通の死」を、死に逝く者に付き添うという形で、「もう一つ別の共同体」の所在を問うべく要請しているのである。本論文は、ハイデガーの「私の死」における議論での「共存在」の考察の不十分性を指摘しながら、「死」が「私」と「あなた」の双方への還元を拒みつつ、「われわれの死」を通じての共同体の思考を求めるものであることを主張して締めくくられる。

<論文審査の結果の要旨>

本論文は、ハイデガーにおいて「共存在」の概念が、「学的共同体」「共に哲学する者」「闘争共同体」というしかたで、彼の哲学についての根本的なモチーフをなしていたことを指摘しながら、それが伝統的哲学史の「破壊」と前学問的経験からの実存論的分析という哲学的主題の内部にまで反映されていることを明らかとし、他の学問と哲学の差異を示

しつつ、共同関係を大学改革という形で提起しようとしていたことを論証している。『存在と時間』を解釈するにあたって、それ以前の講義を参照することは今日では常識となっているが、「他者」の概念、および「学問論」の観点から、『存在と時間』とそれ以前の講義との連続性を示した研究は、いくつかの例はあるものの、まだ多くはない。その意味で、ハイデガーの『存在と時間』や「ドイツ大学の自己主張」における「民族」や「共同体」の概念を、大学論と学問論的文脈から解釈すべきであることを示し得た点で、ハイデガー哲学の解釈に一石を投ずるものであると評価することができる。また、『存在と時間』の最重要問題である「死」の問題についても、ハイデガーにおける他者の死の扱い方の不十分さを踏まえて、ナンシーやリングスらの論点を突き合わせ、ハイデガーについての批判的論点を提示している点も、「死」と共同性を論じる視点として新しい論点を考察していると言えよう。そのかぎりでは本論文は、ハイデガーの『存在と時間』前後における他者論と共同体論の一貫性をハイデガーの学問論と大学論に関連づけながら論証するというハイデガー研究史に貢献する側面と、デリダやナンシーやリングスらが1980年代以降、とりわけハイデガーのナチス関与批判が行われた時期以降のハイデガー再読の可能性を共同体論的文脈に見る解釈の側面とを併せ持つ点にその解釈の現代性があると言える。それはハイデガーにおける時間論や言語論などから考察する従来の解釈とは異なったハイデガー像を提示しており、今後検討に値する論点を提出していると評価できる。

他方で、そうした論点の斬新さが、解釈上いくつかの問題を残していると思われるので、以下に指摘しておきたい。まず、ハイデガーの「民族」「闘争共同体」概念が、たしかに学問論や大学改革論的文脈で用いられるものだとしても、もう一方で、その歴史性は学問論内部のものではなく、現実に生きられた歴史性、すなわち第一次世界大戦後の苦境にあるドイツの歴史ということが、やはり含意されているのではないだろうか。こうした点で、本論文は、ハイデガーの実践的主張を、一方的に単純化する政治的批判の文脈から切り離して論じようとするあまり、ハイデガーの歴史的問題意識や危機意識を、学問論や大学改革論の文脈に切り詰めてしまった面もあるように思われる。ハイデガーが「世界生起 Welt-Geschichte」と言うときに、それは大学改革に限定される話であるとは思えないところがある。その意味で、ペゲラーをはじめとする政治的文脈の指摘（あるいはハイデガーの政治的稚拙さの指摘）を本論文は批判的に遠ざけているが、やはりいくぶんかは政治的文脈もそこには介在しているのではないのか。この点で、本論文は、従来の解釈に対する対立的視点を導入することには成功しているが、両解釈の対立を止揚して、より本質的なハイデガー思想の解釈に踏み込むには至っていないという印象を受ける。

また、ハイデガーの思想と論述に密着し、安易に外在的な批判をするまいという態度は、哲学解釈において必要な態度ではあるが、それでもときには、ハイデガーの論述を正当化することに終始してしまっているように思われる点が見られた。たとえば、個別領域に関する学問への批判ということ言えば、フッサールにおける「領域存在論」と「形式存在論」の区別など、ハイデガーが当時知り得たドイツの大学での学問論の状況は、やはり考

慮しておくべきであっただろう。フッサール、デイルタイ、リッケルトなどの間で、学問の区分や方法論的区別についてさまざまな論が展開され、ハイデガーの「基礎的存在論」の着想も、そうした学問論へのハイデガーなりの応答であるという歴史背景の認識が不十分であるように思われる。

以上のような課題なども含みつつ、本論文の評価としては、『存在と時間』前後のハイデガーの他者論と共同体論の一貫性について、解釈史上有益な指摘を含む論考として本論文を高く評価することができる。ハイデガー哲学における学問論、大学論と他者論を結びつける斬新な解釈を提示し、十分な文献渉猟に基づく粘り強い文献読解と長大な論考を支える論述内容とを鑑みて、博士学位取得にふさわしい内容を備えたものであると評価できる。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公開審査は2012年1月30日(月)14時から16時30分まで、敬学館242号教室で行われた。審査委員の質問に対する応答は概ね的確であり、学術的かつ専門的な内容についての知識も正確であった。審査委員会は、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在学期間中における学会発表などの様々な研究活動、また公開審査の質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認した。

以上の点を総合的に判断して、本学学位規程第18条第1項に基づいて、「博士(文学 立命館大学)」の学位を授与することが適当であると判断する。